遠江・山と里の民俗

会報　第011号

西浦田楽
能衆の食

西浦田楽学習会（にしうれでんがく）

浜松市文化財課 課長　太田好治

国指定重要無形民俗文化財・西浦の田楽を紹介する学習会が、平成三十年六月十七日(日)、天竜区水窪町西浦地区の地元団体主催で開催されました。学習会は今年度で四回目を迎えました。

今年度の「西浦田楽の学習会」は、午前中に地区を流れる翁川と国道一五二号線沿いにある施設・西浦田楽の里（こちらも現在は地元が運営しています）で開催し、午後は会場を水窪の中心街にある水窪文化会館に移動して二部構成で開催されました。

一部　能衆の食する精進料理体験

午前中は、毎年旧暦一月十八日（旧暦は月の満ち欠けを中心とする暦で、西浦田楽では祭りの場面の月の出などをとても大事にされています。現在の暦で今年は三月五日にあたりました）に行われる西浦田楽を演じる「能衆」のみなさまが、田楽の当日まで潔斎する精進料理の再現です。能衆を支える夫人ら女性陣の指導で、参加者らも味噌をすったり、豆腐を炭火で焼いたりと調理をお手伝いし、約四十人が作ったばかりの料理をいっしょに味わいました。この食事会には午後の講演会の講師や天竜区長、市文化振興担当部長らも参加しました。ひとりひとり高膳にのった料理を楽しみながら、夫人からは、食材の説明や、潔斎の期間や食事の内容が能衆の家ごとに独自であること、能衆からは、舞への想いや潔斎時の食事の作法などについて貴重なお話がありました。

二部　西浦田楽を学ぼう～

民俗写真家・須藤功先生講演会

午後は、水窪文化会館にて、写真家の須藤功先生を講師にお迎えした「西浦のまつりに学ぶ」と題した講演会です。食事会の参加者だけでなく、地元のみなさまも集まって百人近くが聴講しました。須藤先生は、民俗学者・宮本常一に学び、昭和三十九年に初めて水窪に取材しました。昭和四十五年に写真集『西浦のまつり』を刊行して、これにより西浦田楽が広く世の中に知られるようになりました。

ご本人にとっても久しぶりの水窪訪問となったそうで、当日の講演では、古くから西浦田楽を研究した折口信夫・早川幸太郎らの動向のほか、ご自分が撮影した写真の中から、先代の能衆が舞われている場面など、地元にとってなつかしい風景をご紹介されていました。講演終了後も須藤先生は会場にとどまり、参加者有志との交流会(茶話会)が始まって、五十年前のようすを語り合いました。

地元のみなさまが主催し、広く地域外のみなさまが参加して地域固有の文化を理解するための交流会がつづいていくことは、今後の文化財の継承にもつながるものと存じます。

民俗写真家・須藤功先生

十津川郷の民俗芸能を訪ねて
～継承への取り組み～

柴田　宏祐

全国の村で一番広い奈良県十津川村。武蔵地区

光明寺の燈籠

第５号の「懐山へ届いたお宝」で、大和の国（奈良県）十津川郷武蔵村光明寺の什物であった燈籠が懐山おくないのご本尊前に供えられたことを紹介した。

それは明治の初めの廃仏毀釈によって村内にあった仏教寺院がことごとく廃寺になり、仏像や仏具が川に流されたり、焼却されたりしたという。その中で一対の唐金の灯篭は秘かに村外に持ち出されて、難をまぬがれた。遠く遠州の地までやってきた燈籠は晴れて懐山おくないのお堂に鎮座することになった。１５０年という長い年月の旅にもかかわらず全く無傷であった。

天竜区懐山にある光明寺の燈籠

弘化二巳口吉辰奉燈
本尊前寄進　中村左馬之丞
　　岸本庄兵衛
　　玉置幸右衛門
和州十津川郷武蔵村
光明寺什物　惠殊代

十津川から訪れた人々

新聞報道された記事を見て、既に２年前に十津川村出身者がお一人燈籠を訪ねてこられた。その際、次のような台座に彫られた刻印を見て、先祖への思いを新たにされていた。

燈籠を訪ねてきた十津川村の方と

再び６月に、十津川村武蔵の方々６人の方が遠路はるばる燈籠を見に来られた。

燈籠は十津川から浜松までどのような旅をされたのかといたわるように燈籠との再会をいとおしんでおられた。

燈籠の故郷を訪ねて

逆に燈籠の鎮座しておられた十津川郷武蔵はどんなところだろうかと思い訪ねてみた。ここにも重要無形民俗文化財「武蔵の盆踊り」が伝承されているので、それを見ながら、８月14日に武蔵へ足を運んだ。

険しい紀伊山中にある十津川村は山また山の村であった。奈良盆地から50余りのトンネルを越して武蔵に到着することができた。紀伊の山々を越す道路ではあるが、改良されて以外に道幅は広く、急峻ではなかった。

十津川村武蔵光明寺の仏像

武蔵は国道１６８号線から急峻で狭い山の中腹にある50戸程の集落であった。明治の初めの廃仏毀釈の嵐の中で消えたはずの光明寺の寺跡には秘かに守られてきた仏像が祭られていた。

浜松まで旅してきた燈籠がこの仏像の前にあったかと思うと感慨を隠しえなかった。厳しい規制を乗り越えながら、信仰を貫き通した武蔵の人々のけなげな心に触れたようで、燈籠の故郷を訪ねた意義を深めることができた。

武蔵の盆踊り

戸数50戸余り、人口１３０人の武蔵には重要無形民俗文化財の「十津川の大踊り（武蔵の盆踊り）」が行われている。

武蔵の大踊り

この保存と継承ぶりをしりたかったのもこの地を訪れた目的であった。廃寺になった光明寺の跡地に小学校が建てられ、昭和45年まで賑わっていた校庭で盆踊りは始まった。櫓の前に浴衣に太い襷を掛けた村人が笹に吊るした燈籠を持ちながら

「むかいの山のとろゝかずら
三〇三のしゅめかずら
さがののてらのよい酒なれば
　宇田やもとの殿子らにお寺
の青竹召され　尺八竹に夜が
伸びた・・・・・・・・・」

とのどかな歌と太鼓に合わせて踊りが始まった。やがて、「なむあみだぶつ　さおどらいで」とまさに仏教の盆送りそのものではないか。消えたはずの仏教は人々のなりわいやならわしと結びつきながら連綿と伝わっていたのである。

　紀伊山地修験場として、あまたの山伏や僧侶の行き交った地に育まれた深い信仰心が息づいていているようで、深い感動に浸った一夜であった。

大阪の大学生が支え続けて

　大阪市立大学の中川眞先生はここへ通い詰めて38年年になられるという。毎年ゼミの学生を連れてこられ、準備から当日、翌日の片づけまで若い学生が泊まり込みで関わっていた。今年も30人余りの男女の学生が踊りの輪に加わり、盛り上げていた。継承に果たしている役割はたいへん大きい。

支えられて継承　武蔵の盆踊り

「私達だけではとうに武蔵の盆踊りは消え去っていたでしょう。大学生の皆さんのおかげですよ」と村の人は口々に語っていた。

　今年も参加して、盛り上げてくれていた大阪市立大学の学生さんのレポートからその状況を探ってみたい。

武蔵の研究に打ち込まれている中川先生(右)

武蔵の大踊りに参加して

大阪市立大学　2年　山本ひろと

　この度私は、大学の授業の一環として、十津川村武蔵の盆踊りに参加させていただいた。この授業の大きな目的は、「地域課題に対する意識を持ち、その課題を解決するための知識能力を養成する…」(2018.3 大阪市立大学　事業報告書より、一部改)である。

　そのような見方でこの地区の盆踊りを見た時に、いかに武蔵にとって盆踊りが重要なものであるかという事が、ひしひしと伝わってきた。村外からも多くの人が集まるこの盆踊りは、一年で唯一、武蔵を非日常の場へと変えてしまう。ヨソモノを嫌う集落というものも、全国にはいくつもあるが、ここ武蔵はそうではない。実際にヨソモノである私も、櫓の設営から盆踊りを通して、非常に歓迎され、まるでここに住むもののように、温かい歓迎を受けた。

　踊りの中休みに、村に住む人何人かに話を伺うことが出来たが、皆口をそろえて、この時期は多くの人が集まって、武蔵が元気になるから、ありがたいと言っていた。決して大きな集落ではないからこそ、人の繋がりを感じることの大切さを知っているのではないだろうか。

　話を盆踊りへと戻す。実際に参加して感じたことは、その奥深さである。踊りは、最後の大踊りを含めて約30種類。その一つ一つに別々の振り付けがあり、とても数回の練習では真似しきれない。しかし、年配の方たちはどの踊りも迷うことなく自然と踊る。

村の方に手ほどきを受けながら

　外から眺めると、足の先から扇の先端までがひとつになったような、生き物のような美しさがある。おそらくその美しさは、複雑な動きが体に染みついて生まれるものだと思う。

　一つの芸術文化として完成されているのが盆踊りであると、私は考えるが、その中でも武蔵のそれはバラエティに富んだものである。美、祈、楽、喜、等々、様々な思いが交錯する中に、奥深さを感じることが出来る。

　この魅力に魅せられてしまった私は、来年以降もこの時期を十津川で過ごすことになるだろう。武蔵の盆踊りは、そのように人を魅了できる盆踊りであると思う。

盆踊りに興じる大学生の皆さん

編集　浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会・発行　浜松市　電話〇五三-四五七-二四六六

■浜松市認定文化財民俗芸能の部■

東　区　有玉南町 有玉神社の流鏑馬神事 旧八幡神社に三自治会の代表が奉納する。○

東　区　松小池町 松之浦神社の注連縄 鳥居の注連縄を俵形とし、亀甲状に結ぶ。

南　区　金折町 金折津島神社祇園祭（ヨイトー）8月4日の夜、大松明を運ぶ虫送りと天王祭。

東　区　中野町 中野町の煙火 毎年8月14日開催。元は六所神社に奉納。

西　区　神ヶ谷町 賀久留神社の神幸祭 毎年10月に開催する田楽と神輿渡御。

西　区　雄踏町 息神社の田遊祭 三月、宮座の人びとが稲の栽培を祈念する。●○

西　区　舞阪町 舞阪の大太鼓祭り 旧暦9月14、15日、岐佐神社に奉納する。

西　区　雄踏町 雄踏歌舞伎万人講。昭和27年中断、平成元年から保存会が復活。○

西　区　雄踏町 雄踏町山崎の百万遍念仏 毎年8月1日川施餓鬼とともに開催される。

北　区　引佐町金指 金指市神様の祭祀近藤家の金指開発に由来する市場祭祀を継承。

北　区　引佐町 東久留女木の万歳楽。2月に阿弥陀堂で行う祭事、芸能は失われた。●○

北　区　細江町気賀の細江神社祇園祭。津波で流れ着いたご神体が浜名湖を渡る。

天竜区　佐久間町浦川 浦川歌舞伎 尾上栄三郎を偲ぶ村歌舞伎、平成元年復活。○

天竜区　佐久間町中部 佐久間竜神の舞 昭和32年に佐久間ダム殉職者の供養で開始。

天竜区　佐久間町奥領家 芋掘神楽 日月神社秋季例祭で奉納される。

天竜区　佐久間町相月 松島神楽 明和4年(1767)開始、御鍬神社で12演目。

天竜区　水窪町奥領家 八幡神楽 八幡宮矢場開きの獅子舞、昭和初期に復活。

天竜区　二俣町 鹿島の花火 明治8年(1875)頃、椎ヶ脇神社奉納として開始。

天竜区　二俣町 二俣まつり 諏訪神社の祭礼、13台の屋台を曳きまわす。

金指市神様の祭祀

奥領家 芋掘神楽

奥領家 八幡神楽

奥領家 八幡神楽 矢場開きの獅子舞

●遠江のおくないとひよんどり連絡協議会　加入団体　全７団体
解説冊子やポスターで紹介

○浜松市無形民俗保護団体　加入団体　全21団体　随時本誌で紹介

No.	文化財名称	所在地	指定区分	11	百万遍念仏と念仏講	北区細江町	市指定
1	寺野のひよんどり	北区引佐町	国指定	12	犬居つなん曳	天竜区春野町	市指定
2	川名のひよんどり	北区引佐町	国指定	13	勝坂神楽	天竜区春野町	市指定
3	懐山のおくない	天竜区懐山	国指定	14	滝沢のおくない	北区滝沢町	国選択
4	西浦の田楽	天竜区水窪町	国指定	15	今田花の舞	天竜区佐久間町	県選択
5	呉松の大念仏	西区呉松町	県指定	16	神沢のおくない	天竜区神沢	
6	滝沢の放歌踊	北区滝沢町	県指定	17	東久留女木の万歳樂	北区引佐町	
7	横尾歌舞伎	北区引佐町	県指定	18	雄踏歌舞伎「万人講」	西区雄踏町	
8	川合花の舞	天竜区佐久間町	県指定	19	浦川歌舞伎	天竜区佐久間町	
9	西浦の念仏踊	天竜区水窪町	県指定	20	息神社の田歌祭	西区雄踏町	
10	遠州大念仏	中区鹿谷町	市指定	21	有玉神社の流鏑馬神事	有玉南町	